

令和3年度 異常気象分析検討会（第1回） 議事概要

1. 開催日時

令和3年9月13日（月）14:00～16:00

2. 開催場所

気象庁会議室3（気象庁11階）

※テレビ会議システムによる開催

3. 出席者

別紙1のとおり

4. 議題及び検討結果の概要

令和3年8月の記録的な大雨の特徴とその要因について、資料1を用いて検討を行い、報道発表資料「令和3年8月の記録的な大雨の特徴とその要因について」（令和3年9月13日発表）¹のとおり見解をとりまとめた。主な要因は以下のとおり。

- ・ 日本の北で発達したオホーツク海高気圧と平年より南に偏って南海上に張り出した太平洋高気圧との間で対流圏下層気温の南北差が強まって、盛夏期にもかかわらず梅雨の後半のような大気の流れとなり、西日本～東日本に前線帯が形成された。そこに中国大陸からと太平洋高気圧の縁辺に沿った水蒸気の流入が集中する状態が続いたため、広範囲で持続的な大雨となった。
- ・ 西日本～東日本への多量の水蒸気の流入をもたらした太平洋高気圧の南偏には、対流圏上層の亜熱帯ジェット気流が東アジア域で平年より南下し、日本の西方で顕著に南に蛇行したことが関わっていた。その影響で、日本付近では上昇気流が起きやすく、降水活動が維持されやすい状況となっていた。
- ・ 亜熱帯ジェット気流の南下には、熱帯インド洋の海面水温変動とそれに関連したモンスーン活動の変動が影響した可能性がある。

なお、九州北部地方で線状降水帯による非常に激しい雨や猛烈な雨が降り続いた8月14日は、前線の南側で積乱雲が発達しやすい環境となっていたことに加え、東シナ海の前線上にスケールの小さな低気圧が発生し、その東側にあたる九州の西の海上では多数の積乱雲が線状降水帯として組織化されやすくなっていたとみられる。

¹ <https://www.jma.go.jp/jma/press/2109/13a/kentoukai20210913.html>

令和3年度 異常気象分析検討会（第1回） 出席者

異常気象分析検討会 委員

◎	なかむら 中村	ひさし 尚	東京大学先端科学技術研究センター 教授
○	たかやぶ 高薮	ゆかり 縁	東京大学大気海洋研究所 教授
	いしかわ 石川	いちろう 一郎	気象研究所全球大気海洋研究部第二研究室長
	うえだ 植田	ひろあき 宏昭	筑波大学生命環境系 教授
	かわむら 川村	りゅういち 隆一	九州大学大学院理学研究院 教授
	きもと 木本	まさひで 昌秀	国立環境研究所 理事長
	たにもと 谷本	よういち 陽一	北海道大学大学院地球環境科学研究院 教授
	つぼき 坪木	かずひさ 和久	名古屋大学宇宙地球環境研究所 教授
	のなか 野中	まさみ 正見	海洋研究開発機構アプリケーションラボ グループリーダー
	ひろおか 廣岡	としひこ 俊彦	九州大学大学院理学研究院 教授
	むこうがわ 向川	ひとし 均	京都大学大学院理学研究科 教授
	わたなべ 渡部	まさひろ 雅浩	東京大学大気海洋研究所 教授

(◎ : 会長、○会長代理、敬称略、会長・会長代理以外は五十音順)

気象庁

大気海洋部

部長

業務課長

気候情報課長、異常気象情報センター所長、同予報官

環境・海洋気象課長、海洋気象情報室長

予報課長

情報基盤部

数値予報課長

気象研究所

気候・環境研究部長、応用気象研究部第二研究室 主任研究官

その他関係官